

戦国大名今川・武田氏の駿府浅間社支配

前 田 利 久

はじめに

『静岡県史料』第三輯におよそ一〇〇点もの中世史料が収録されながら、研究が比較的少なかったのが静岡浅間神社である。^①

静岡浅間神社とは、賤機山城址に続く浅間山の麓に合祠された数々の神社の総称で、近世までは、富士新宮（現浅間神社^{あさま}）・駿河国惣社（現神戸神社）・奈古屋（現大歳御祖神社）・山宮（現麓山神社）の四社と、その他の末社等を総称して駿河府中浅間社と呼ばれていた。ここには惣社神主と、奈古屋・山宮の神主を兼任した新宮神主との両神主^②の下に多くの社人・社僧が数々の神事を司っていた。

それでは、この複雑な神社組織や神事に、戦国大名はどのように関与していったのであろうか。大久保俊昭氏は、かつて今川氏が富士大宮浅間社にとった対策は「国人領主としての富士氏支配と個別社家支配という二面的政策」であったと述べられた。^③周知のとおり大宮浅間社（富士本宮）は、駿河一宮であり、大宮司家である富士氏は、その祭司権と地の利を背景に富士郡下に領主制を展開した国人であった。一方の駿府浅間社は、国主今川氏の膝下にあり、駿河惣社や富士新宮などが集合したものであり、立地条件で両社には大きな違いがあるものの、駿府浅間社の神威もまた今川氏にとっては、領国統治に必要なものであった。そこで小稿では、主に戦国大名今川氏・武田氏による駿府浅間社の支配について検討したい。

一 今川氏政権下の浅間社

(1) 今川氏と神職

今川氏政権下における新宮・惣社両神主に関する史料はきわめて少なく、特に惣社神主に関する文書は皆無といつてよく、『駿河記』ではその理由を「古代の文書・記録等は、永禄・天正の兵火に失せて伝らず」と述べている。⁽⁴⁾ただわずかに「宗長手記」の大永五年（一五二五）十一月十四日に「あるつれづれに、当宮惣社の神主、志貴駿河守泰宗、ひねもす物がたりと、当社造営由来の事、あきらかに代々守護の敬信、同願文などの事かたりて後、文にいひつかはし侍り」⁽⁵⁾とある。惣社神主が「志貴駿河守泰宗」と名乗り、一方の新宮神主が今川氏真の判物に（表一、19号）「中村左近将監」として登場し、さらに宛名を欠くという難点はあるものの、今川義元の感状（表一、16号）が伝わることから、両神主は今川氏の被官でもあったと思われる。とはいえ、富士の大宮司富士氏のような国人領主としての強大な権力を有したわけではない。また社中においても神主は、数々の社人たちを束ねて指揮する立場にあったものの、社人たちは神主に従属していたわけでもない。天文二十年（一五五〇）八月、義元は「浅間宮神職之事」（表一、13号）について新宮神主を訴えた社人新宮大夫に対し、「今度新宮神主懸非分申之条、太以曲事也、自今以後神主於非分申者、雖為何時可申出、急度可加下知者也」と沙汰しているように、社人に神主の不正や職権の乱用を訴えさせて、神主の権力集中を防いでいる。

次に両神主の下にあって、多くの神事や社務を実際に担当した社人について考えたい。社中には多数の社人がいたが、近世の地誌⁽⁶⁾によって主な社人をみると、新宮方には鍵取の新宮大夫・剣役の築地大夫、惣社方には鍵取の惣社大夫がおり、その他に山宮の社人山宮大夫、奈古屋の鍵取奈古屋大夫がいた。さらに新宮・惣社の両社神事奉仕者として、神供米役・神事出仕役の庁守大夫、奉幣使に稻川・東流・馬淵大夫、庁分として先光・長沼・向笠・小黒大夫、奉幣取次役に内藤・田中大夫、流鏑

△表一V 今川氏発給文書

※(県)『静岡県史料』(市)『静岡市史』中世近世史料二

番号	年 月 日	宛 名	差出(花押・朱印の別)	文 書 名	出 典
1	明応4・12・25	東流大夫殿	五郎(花押)	旧東流大夫文書	(県)三一四八一
2	永正18・5・4	村岡	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四八三
3	大永3・12・19	馬淵松千代殿	修理大夫(花押)	旧大宮司富士家文書	(県)二一二〇五
4	天文5・6・10	村岡	(黒印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四八三
5	" 6・6・13	馬淵又三郎殿	義元(花押)	旧稲川大夫文書	(県)三一四七三
6	" 8・12・12	村岡宮千代丸	未詳	旧村岡大夫文書	(県)三一四八四
7	" 8・12・14	村岡宮千代丸	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四八五
8	" 11・9・13	新宮神主殿	治部大輔(花押)	浅間神社文書	(県)三一三七二
9	" 18・8・7	村岡彦九郎とのへ	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四八五
10	" 18・8・11	欠	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四八七
11	" 18・8・23	村岡彦九郎殿	治部大輔(花押)	旧村岡大夫文書	(県)三一四九六
12	" 20・6・18	村岡彦九郎殿	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四九七
13	" 20・8・13	新宮大夫殿	治部大輔(花押)	判物証文写所収文書	(市)二七〇
14	" 21・4・26	浅間奈古屋棟大夫	(朱印)	旧奈古屋大夫文書	(県)三一五二二
15	弘治3・9・1	村岡彦九郎殿	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県)三一四九八
16	(未詳)・11・4	欠	義元	旧新宮神主文書	(県)三一四四八

17	永祿1・8・13	村岡左衛門尉殿	氏真(花押)	浅間神社文書	(県) 三一三七三
18	// 1・8・13	村岡左衛門尉殿	(朱印)	浅間神社文書	(県) 三一三七四
19	// 2・12・27	中村左近将監殿	氏真(花押)	浅間神社文書	(県) 三一三八三
20	// 3・3・3	欠	(朱印)	浅間神社文書	(県) 三一三八五
21	// 3・5・13	浅間那古屋榊大夫	(朱印)	旧奈古屋大夫文書	(県) 三一五二三
22	// 3・12・12	庁守小太郎とのへ	氏真(花押)	旧庁守大夫文書	(県) 三一五一二
23	// 4・4・18	馬淵金千代殿	氏真(花押)	穴八幡神社文書	(市) 四三三
24	// 5・10・11	村岡左衛門尉とのへ	(朱印)	旧村岡大夫文書	(県) 三一四九九
25	// 6・7・6	村岡左衛門尉殿	(朱印カ)	旧村岡大夫文書	(県) 三一五〇〇
26	// 11・6・8	浅間那古屋榊大夫	(朱印)	旧奈古屋大夫文書	(県) 三一五二三

馬奉行として村岡大夫などがいた。これらはあくまでも近世末の役職だが、その名称や任務・家格は中世に由来するものである。またこの時点で断絶したままになった社人もいくつかあり、戦国期に比べて簡略化されていたことが考えられる。

今川時代の社人の職務に関する史料は限定されているが、それらによると、社人のなかで今川氏と特に密接な関係にあったのは村岡大夫であった。村岡大夫については、宮本勉氏が明らかにされているように、すでに今川氏親の段階で、井川において何れの知行地にも関係なく河堰草の下刈り(砂金採取)を許されるなどの特権を有していたが、特に今川氏と関係が深まったのは、義元が流鏑馬神事に積極的に介入するようになってからであった。この流鏑馬神事への積極的な介入については、大久保氏によって詳細な研究がなされている。^⑧すなわち、今川氏は絶頂期を迎えた義元によって流鏑馬神事を直接統轄し、その祭司権を掌握することによって浅間社の統制を行い、同時に役銭の賦課によって在地支配を図ったのである。役銭の賦課地が

駿河半国に及ぶ流鏑馬神事への介入は、今川氏の駿河支配にとって欠くことのできないものであったが、そのなかで国主の膝下でありながら、四十年来も役銭未納が看過されていた沼上郷をはじめ、諸郷への役銭徴収は村岡大夫が命じられていた。当然村岡大夫にはこの役銭徴収に関する文書が多く出されたが、義元の初期の文書には（表一、6・7号）、役銭未納地への糾明を行う一方、村岡大夫に対してもその任務について「於御神役緩怠者、可改補其職」などの文言がみられ、義元による直接的な厳命が下されていた。

奈古屋の櫛大夫は、富士参詣道者の先達を務めていたが、その際に道者に対して袈裟や円座・木綿などの専売権を有していた。しかしこの専売権は、山伏や陰陽師によって度々侵害され、義元・氏真はこれを制して櫛大夫を保護した（表一、14・21号）。

その他、社人の名称は明らかではないが、「言継卿記」に「今日廿日会有之、（中略）当社新宮祢宜・同総社祢宜兩人、櫛・土器物持来、酒及数盃了」という記述がみられ、神事の際、神社の代表として今川氏の賓客への接待や交流を行っていた。

このような社人のなかには、今川氏の家臣と縁戚関係を結ぶ者もいた。永禄四年（一五六一）氏真は、井出惣左衛門の男子が馬淵家と養子縁組を行って馬淵大夫を相続することを認めている（表一、23号）。その判物のなかに「一跡相続之段、奏者浦原丹後守、新宮神主尔理相定之上者、令領掌畢、」とある。これによると、奏者である浦原丹後守を介して、新宮神主との話し合いが済んだうえで氏真が相続を認めるとしており、社中の人事の決定に関しては神宮神主に権限が有ったことがわかるが、最終的な任命権は今川氏が有していた。またこの場合の神役任命は、社家と今川家臣との縁組という背景があるが、社家そのものの家督相続に関する任命権も、すでに大永三年の段階で今川氏親によって掌握されていた（表一、3号）。

以上、きわめて断片的な史料に基づいて今川氏と神職との関係について述べたが、最後に神職に出された文書の宛名記載を、武田政権下のものと比較してみたい。表一・二からわかるように、例えば武田氏では「新宮之神主左近将監」（表二、5号）とあるのに対し、今川氏真は「中村左近将監」（表一、19号）と記し、「庁守大夫」（表二、15号他）に対して「庁守小太

郎」(表一、22号)とあり、「村岡大夫」⁽¹⁰⁾に至っては、「村岡宮千代丸」(表一、17号他)・「村岡彦九郎」(表一、9号他)・「村岡左衛門尉」(表一、17号他)というように改名が段階的にわかる。ここから武田氏が各々を神職として公的な立場に置いて接したのに対し、今川氏は公的な立場を認めつつも、さらに私的な被官としてとらえていたことが察せられるのではないだろうか。

(2) 今川氏と神領

流鏑馬神事の役銭徴収に今川氏が苦慮したように、浅間社の神領には銭納を滞らせる背景があったと思われる。以下今川氏時代の神領と今川氏の対策について考えたい。

大永三年十二月の馬淵松千代に宛てた今川氏親の判物(表一、3号)のなかに「馬淵弥次郎跡職之事、右令沽却本知行、逐電法鉢云々、(中略)者、恒例祭祀守先規可令勤仕」とあり、社人の一人である馬淵大夫が知行地を売却したまま逐電したことがわかる。このように神職による売却によって神領や社領の一部が、やがては今川家臣の屋敷地や給地へと移りかわっていったようで、浅間社の祭銭を書き上げた今川義元・氏真の朱印状(表一、10・18号)のなかに「関口宮内少輔殿御屋敷銭」・「岡部帯刀殿屋敷銭」・「由比助五郎方、朝比奈方共」といった記述が多くみられる。また村岡大夫の管轄下にある足洗大明神領については、次のような史料(表一、6号)がある。

足洗大明神々領壺町参段之事、

右、百姓等為私押置之由子細相尋之處、就于去丙申一乱、彼造営勸進物等紛失故、雖令無沙汰、如此云々押領、非據之至也、所詮当年々貢者為足輕衆扶持山本与九郎
分九俵去年足洗勘定不足分可相渡也、従来年庚子如前々可收務之、(中略)

天文八年十二月十二日

村岡宮千代丸

「丙申一乱」とは、天文五年（一五三六）に義元の庶兄である玄広恵探（良真）が家督の継承をめぐって起こした反乱であるが、この混乱に乗じて百姓たちによる押領が行われたようである。また糾明を遂げた今川氏によって、その年の年貢が足輕衆の扶持米として処分されていることもわかる。

以上のように神職の没落、神領や社領の移動、百姓による押領などを防ぐためにも、今川氏は神領や社領の売却を禁じ、さらに祭銭の徴収先を明確に把握せねばならなかった。浅間社のような例は、他の寺社領においても同様のことが頻繁に行われたのである。義元は天文二十二年二月に制定した「仮名目録追加」の第六条のなかで次のように定めている。^⑪

（上略）或奉公の者、或神社仏寺領売得の事、一切不可有之、但奉公之者、陣参急用に付てハ、二三ヶ年期之事ハ宥免也、神社仏寺領之事も、修造顕然たらハ、同前に是を免許すへき也

義元は、このように神社仏寺領の売却については、修造のために特に必要な際の年期売りの場合を除いて禁止した。ところが、浅間社内神職の窮乏ぶりは著しかったようで、神事祭礼を理由に過分の神領売却が行われたようである。

就進退困窮訴訟之事、

右、先年相定法度神領社領沽却并令買得輩一切令停止之處、神領過分尔沽却、借錢借米無際限云々、（中略）縦借状尔為神事祭礼借用之文言不可及損失之旨雖判形出置、錢主訴訟不可及許容、向後親清進退訴訟、縦神職雖令上表、不可及其沙汰之状如件、

永禄貳_{己未}年

十二月廿七日

氏真（花押）

中村左近将監殿

右の新宮神主中村正清に宛てた氏真判物（表一、19号）によると、社人の一人親清なる者が神事祭礼を理由に、過分なる神領の沽却、際限のない借錢・借米を行って進退困窮に至ったことがわかる。これは対して氏真は、錢主が買得した神領のうち

「半分者親清可請取之、」などとし、親清自身に対しても、本来は「改易」すべきところ、今回だけは「各批判」のうえ「用捨」するなどの救済措置を取っている。ただし、今後いかに借状に神事祭礼のためという文言を明記したにせよ、錢主・親清両者の訴訟は受け付けないと強く注意している。

次に、神職の手から他人の手に渡った神領に対する祭錢の徴収について考えたい。

永祿五年の今川家朱印状（表一、24号）のなかに「浅間領関口宮内少輔殿居屋敷地子之事、右、去年当年有無沙汰云々」とある。この関口宮内少輔とは、前述の義元・氏真の朱印状（表一、10・18号）のなかに「浅間宮御役錢之事」として、屋敷錢八百文を納めることになっている。それが二カ年にわたって未納状態であり、氏真は村岡大夫に「四宮与一郎前より」「堪忍分」をもって、例年のように請け取るよう沙汰している。四宮与一郎が支払う堪忍分とは、いかなる理由によるかは述べていない。ただ、五年前の弘治三年に「中河之内浅間神領屋敷」の権利をめぐる相論において、「四宮図書助」なる人物が義元によって「図書助申掠段歴也、」と非を言い渡されたことがあり、（表一、15号）あるいはこれに由来するとも考えられる。いずれにせよ、今川氏は、家臣の祭錢未納という失態に関しては、他の家臣への罰金をもってそれに当てていたことがわかる。

また、家臣の手に渡った神領が、さらに第三者の手に移動した事例として、永祿六年の蒲原弥三右衛門尉による宝持院への売却例がある（第一、25号）。このような役錢滞納の要因となる神領の重なる移動に対し、氏真は「流鏑馬錢五百廿五文如前々、於向後者縦宝持院前可請取之、」と沙汰している。これについては大久保氏のご指摘のとおり、¹²浅間社の役錢を土地の移動に関係なく、恒常的に賦課していった今川氏の積極的な姿勢を見ることができる。

以上のように、今川氏が流鏑馬などの神事を全うさせることによって社中を統制し、在地に介入していったにもかかわらず、社中では神職の窮乏による神領の売却が行われた。また今川家中においても桶狭間の敗戦を経て氏真の代に入ると、家臣による役錢未納や神領の売却が行われるなど、今川氏の積極的な介入の一方では、社中・家中において神事を滞らせるような内側からの矛盾が生じていた。

二 武田氏政權下の浅間社

(1) 駿府攻略と社人の断絶

永禄十年（一五六七）武田信玄は一方的に甲相駿の三国同盟を破棄すると、徳川家康と共に今川領国の分割を謀り、翌年十二月十三日駿府の今川館を落として、氏真を掛川に逐った。こうして戦国大名今川氏を滅ぼして攻略した駿府だが、強敵である東の北条氏康・氏政父子、北の上杉輝虎の脅威に、わずか五ヵ月で甲府へ撤退を余儀なくされた。この間浅間社には、永禄十一年十二月新官方の鍵取役新宮大夫に、日供勤仕を新宮神主の計らいとなすよう沙汰し（表二、1号）、翌年二月流鏑馬奉行村岡左衛門尉に、的銭の徴収について（表二、2号）、三月には新宮神主に御供の受用について（表二、3号）それぞれ従来のごとく沙汰している。

武田氏が甲州に引き上げると、駿府は今川氏の旧臣岡部正綱らが占領した。信玄は十一月に駿河に出陣し、十二月に北条方の蒲原城を落とすと駿府に入り、岡部正綱を説得して再び占領するに至った。浅間社には十二月十三日に山宮に高札を立てて保護し（表二、4号）、明けて永禄十三年正月二十日、新宮神主に社中の定書を出した（表二、5号）。ここで注目されるのは、第三条の「神役之人断絶之所」という文言である。断絶した神役については、同日付で出された武田家朱印状（表二、6号）に次のようにある。

東流大夫、馬淵大夫、安西・村岡等之社人断絶之遺跡、為其方計可被申付之趣被仰出者也、仍如件、

永禄十三年

庚午

（龍朱印）

土屋右衛門尉奉之

正月廿日

武田氏による最初の駿府攻略の際に安堵されている村岡大夫をはじめ、多数の社人が一度に断絶するのは不自然であり、こ

△表二▽ 武田氏（信玄のみ）発給文書

番号	年 月 日	宛 名	花押・朱印の別	文 書 名	出典（県史料）
1	（永祿11）・12・25	新宮大夫	（朱印）	旧新宮神主文書	三一四四八
2	〃 12・2・26	村岡左衛門尉殿	（朱印）	旧村岡大夫文書	三一五〇一
3	〃 12・3・16	新宮神主殿	（朱印）	浅間神社文書	三一三八六
4	〃 12・12・13	山宮	（朱印）	旧山宮大夫文書	三一五四〇
5	〃 13・1・20	新宮之神主左近将監殿	（花押）	浅間神社文書	三一三八七
6	〃 13・1・20	欠	（朱印）	旧惣社神主文書	三一四六五
7	〃 13・2・21	玄陽坊	（朱印）	旧玄陽坊文書	三一五四〇
8	〃 13・2・22	長守大夫	（朱印）	旧庁守大夫文書	三一五一三
9	〃 13・2・22	先光太夫	（朱印）	旧先光大夫文書	三一五二一
10	〃 13・4・5	玄陽坊	（花押）	旧玄陽坊文書	三一五四一
11	〃 13・6・16	新宮神主殿	（朱印）	浅間神社文書	三一三八八
12	（〃 13）・6・16	新宮神主殿	（朱印）	浅間神社文書	三一三八八
13	元龜2・11・25	新宮大夫殿	（朱印）	浅間神社文書	三一三八九
14	〃 2・11・25	新宮大夫殿	（朱印）	浅間神社文書	三一三九〇
15	〃 2・11・25	庁守大夫	（朱印）	旧庁守大夫文書	三一五一四
16	〃 3・3・25	稲河大夫殿	（朱印）	旧稲川大夫文書	三一四七四

17	// 3・4・18	新宮神主殿	(朱印)	浅間神社文書	三一三九一
18	// 3・4・18	新宮大夫殿	(朱印)	旧新宮神主文書	三一四四九
19	// 3・4・18	安西虎満殿	(朱印)	旧惣社神主文書	三一四六五
20	// 3・4・18	馬淵虎安殿	(朱印)	旧惣社神主文書	三一四六六
21	// 3・4・18	庁守大夫	(朱印)	旧庁守大夫文書	三一五一四
22	// 3・4・18	庁守大夫	(朱印)	旧庁守大夫文書	三一五一五
23	// 3・4・18	玄陽坊	(朱印)	旧玄陽坊文書	三一五四二
24	// 3・4・18	田中大夫	(朱印)	田中文書	三一七三

の一年間に武田氏にとって何か不都合な動きが社人のなかにあったことが考えられる。この社人の断絶に関しては、年月日未詳の氏名未詳言上書⁽¹³⁾のなかに「東流大夫・村岡大夫・向笠大夫・小黒大夫右之跡職断絶、ソレヲ何モ別人乱後相拘申候、他之名跡続申候事」・「馬淵・常所大夫跡職一切於御改易者、是非申所無之候、」とあり、先の武田家朱印状の「安西大夫」を加えると、断絶した社人は七家にのぼり、それは「乱」と深い関係があったことがわかる。この乱とは、先に述べた岡部氏をはじめとして今川旧臣の籠城および駿府近辺に発生した一揆を指すものと考えられる。これについては『駿河記』の賤機山城跡の項目に次のような記述があることに注目したい⁽¹⁴⁾。

此城何人の籠りしか未詳。一説には今川没落の後、永禄十二年岡部、安倍、小長谷、酒井其他彼是ここに籠城して、武田家の二度の乱人に信玄入道の鉾先をうけて、弓鉄砲を打出したる地は此処なりと云。総社の神主遠山新蔵は、この城にて討死せしと云。(中略)又、遠山新蔵が討死の事、神君に属し奉りての事とも云。是非未詳。

著者が「一説には」・「是非未詳」と断っているように、岡部氏等が立て籠った今川館の焼跡を賤機山城と誤ったり、惣社神

主遠山新蔵なる者が討死をとげたという事にも疑問が残るが、このような伝承の成立には、当時浅間社内部に反武田派が存在したという背景があったと思われる。

以上のように、永禄十一年十二月に武田氏によって今川氏真が掛川へ追放された後、浅間社の社人たちは武田氏の安堵を得たものの、武田氏が駿府に定着できずに甲州へ撤退したため、社中内部にも動揺が生じ、今川家旧臣と呼応した者が現われた。その結果、流鏑馬神事を通じて今川氏と密接な関係にあった村岡大夫をはじめとする主だった社人は、武田氏の再度の駿府攻略に際して断絶に至ったのである。

(2) 社人の再編成

社中の神事のみならず、駿府近辺の神社の祭司権をも有していた社人たちの再編成と神事の復興は、新勢力武田氏にとって、その権威を駿河の地に具現するうえで、また在地を掌握するうえでも急務なことであった。そこで信玄は「神役之人断絶之所、新宮之神主為相計無欠所様可被申付之事、」(表二、5号)と、新宮神主中村正清に社人の再編成を命じた。しかし、馬淵・安西大夫などの社人が実際に再興したのは、断絶以来二年以上も経過した元龜三年(一五七二)四月のことであった(表二、19・20号)。次の史料はその間の動向を表わす氏名未詳言上書の前半三箇条である。

言上

一、此以前之又兵衛者井出惣右衛門子ニ而、本馬淵筋ニ而無御座候事。

一、本馬淵大夫息女壱人持候間、彼又兵衛は入簪に候間、結句彼妻をば乱後離別仕候事。

一、去年迄彼又兵衛者、曾称内匠助方同心ニ而御役番相勤、只今神家望之由、自由之申事に候歟。

已上

この言上書が何時、誰によって作成されたものかは不明であるが、先に触れたように社人断絶に関する点で興味深い。おそ

らく言上者とは、社人の再編成を命じられた新宮神主であろう。右の三箇条は馬淵大夫の跡職をめぐるものであるが、「井出惣右衛門」とは「井出惣左衛門」の誤りであり、井出氏と馬淵氏との関係については次の今川氏真判物（表一、23号）によってわかる。

駿河国馬淵大夫神領之事、

右、任先判形之旨、如前々不可有相違、然者、親定依無男子^{（擦消）}□□惣左衛門尉子金千代、為猶子親定娘仁令契約、一跡相続之段、奏者蒲原丹後守、新宮神主^{（擦消）}理相定之上者、令領掌畢、此上縁類等一跡雖令競望、一切不可許容、兼又至于後年、金千代・同阿ちや女親定并□□惣左衛門相定文言於背之者、可加下知、此外自然神領之内他所江相紛者、証跡次第可申上、守此旨神事祭礼不可有怠慢之状如件、

永祿四年 酉辛

四月十八日

馬淵金千代殿

氏真（花押）

右の史料では、故意に惣左衛門の姓を擦り消しているが、井出氏であることは言上書によって明らかである。井出氏といえ、富士郡の土豪で、富士大宮の社役・宮中奉行職にあり、また国人領主富士氏の寄子として今川家に仕え、富士氏とともに大宮城に籠って武田氏の抗抵した一族である。大久保俊昭氏によれば、井出惣左衛門成重は、今川氏の過重な軍役によって経済的危機に瀕していた同族に、息子千代寿、娘松千代を通じて婚姻関係を結ばせ、一族の知行等を集中した人物である。この言上書によれば、彼はさらに駿府浅間社の社人馬淵大夫（親定）のもとへも息子又兵衛（金千代）を通じて婚姻関係を成立し、馬淵家の後継者にさせていたことがわかる。ところが又兵衛の義父馬淵親定は、前述のとおり一度は武田氏の安堵を得たものの、その後今川家旧臣に加担したことによって社人としての資格を失い、馬淵大夫は断絶してしまったのである。そこで又兵衛は保身のために親定の娘と離別し、馬淵との縁を絶って武田方の曾祢内匠助昌世の同心となった。やがて武田氏の命に

よる馬淵大夫家の再興の動きを見ると、今度は前歴を理由に神役継承を望んだものと思われる。そこで言上者は、又兵衛の氣随気ままな行為に「只今神家望之由、自由之申事に候歟」と不満を訴えている。

さらに言上書の後半部を見てみたい。

一、常所大夫跡職、先年者朝比奈兵衛大夫方同心板垣子に藤十郎と申人神役相勤候、彼以神領軍役一切不致之候、兵衛大夫同心被官も前々可被存候事

一、彼神領花蔵乱以前安西彦兵衛と申人彼神領相拘候、別に御給有之軍役仕候、それにことよせ軍役之地之由申候事、

一、東流大夫・村岡大夫・向笠大夫・小黑大夫右之跡職断絶、ソレヲ何モ別人乱後相拘申候、他之名跡続申候事某子一身に不限候事

一、彦兵衛先年神領相拘申候事可為御不審候、何も軍役之外神領相拘置候侍衆数多御座候事、

右、畢竟者、馬淵・常所大夫跡職一切於御改易者、是非申所無之候、別人ニ彼職於被仰出者、年来神役勤来候間、具御披露奉仰候、以上、

ここでは神領のうち、常所大夫分に軍役が賦課されようとした事に対して不服を述べている。すなわち、先年板垣藤十郎がこの神領をもって神役を勤めていた際、神領には軍役は一切課せられなかったものを、今回この地を「花蔵乱以前」に安西彦兵衛が所有していた時の事例を根拠に軍役を課そうとしたのである。しかし彦兵衛が軍役を課せられたのは神領の他に所有した知行地であり、神領は軍役とは無縁のものと訴えている。この記述のなかで、彦兵衛の事例を今川氏輝以前としないで、あえて「花蔵乱以前」としているのは、花倉の乱を契機に彦兵衛が神領と無縁になったことを意味するものであり、安西彦兵衛とは、この乱において乱の首謀者玄広惠探側に付いて、今川義元と敵対した人物だということがわかる。同時に武田氏は浅間社の神領に関して、今川氏を三代も溯って取り調べたわけであり、社人の再編成を通じて神領への介入を積極的に行っていたことがわかる。

言上書には、さらに「何も軍役之外神領相拘置候侍衆数多御座候事、」とあるように、安西彦兵衛のような例は今川氏の時代には多々あったようで、言上書は、かつて今川家臣が所有した神領に武田氏によって軍役を課せられたり、さらには神領が新恩地として武田家臣に宛て行われてしまうことを懸念したのであろう。

以上のように武田氏は、社人断絶という形で社中から今川勢力を一掃し、社人の再編成を通じて人事・経済・軍事面など積極的な介入を行った。これに対し神社側では、再編成を命じられた新宮神主が、神領への軍役や江尻城普請役の賦課を憂慮して訴訟を行うなど防衛に努めるが、一方で彼は武田家中の三枝氏と縁戚関係を結んで武田氏勢力に組み込まれていった。

しかし、神事復興の前段階である社人の再編成に二年以上の歳月を費やし、さらに勝頼の代に入ると、流鏑馬銭の主要賦課地であった西駿地域はたび重なる徳川氏の侵入を受けた。特に天正七年（一五七九）九月には、浅間社自体が徳川氏によって焼き打ちに遭うなど、運営面できわめて不安定な情勢となり、浅間社の神威を得ずして武田氏は、天正十年滅亡に至るのであった。

おわりに

本稿は、戦国大名今川・武田氏による駿府浅間社支配を、なるべく内側から明らかにしていこうとしたものであった。しかし長期政権であった今川氏については、史料が限定され、神職が個々に有した職権への直接的な個別介入については、すでに明らかな村岡大夫以外に具体的な検討が行えず、表面的で曖昧なものに終わった。一方、短期間ながら比較的多数の文書が伝わる武田氏に関しては、紙数の都合上、社人の断絶と再編成の指摘に止まり、具体的な運営面には言及できなかった。また両政権下における新宮・惣社神主の位置付けが不明確でもあり、これらを今後の研究課題としたい。

註

(1) 古くは戦前に、宮地直一氏による『国幣小社神戸・浅間・大歳御祖神社誌』と、同氏ならびに広野三郎氏による『浅間神社の歴史』(富士の研究Ⅱ)があるが、両書とも祭祀や由来・通史の記述で、戦国期では神社が蔵する古文書を抜粋し、解説したにすぎない。

戦国大名との関係については、今川氏の流鏑馬神事を通じた浅間神社支配についての久保俊昭氏(註(8))や、小和田哲男氏(『静岡市史』原始・古代・中世)の成果があり、それらのなかで両氏は、今川氏の家督相続と流鏑馬神事とが密接な関係にあったことを指摘されている。

(2) 寛永造営時の棟札(『駿河志料』二一四〇～四九頁)

(3) 大久保俊昭氏「戦国大名今川氏の宗教政策」(『地方史静岡』一四号)

(4) 『駿河記』上―一二五頁

(5) 「宗長手記」(岩波文庫『宗長日記』六六頁)

(6) 『修訂駿河国新風土記』上、『駿河記』上等

(7) 宮本勉氏『史料編年井川村史』第一巻

(8) 大久保俊昭氏「戦国大名今川氏の流鏑馬役」(『駿河の今川氏』第四集)

(9) 「言継卿記」(弘治三年二月二十二日『静岡市史』古代中世史料四五九頁)

(10) 信玄の発給文書(表二、3号)にある「村岡左衛門尉」は、断絶以前の者であり、勝頼の発給によるものは、すべて「村岡大夫」とある。

(11) 『中世法制史料集』第三巻武家家法Ⅰ、一二五頁

(12) 前掲註(8)論文

(13) 「旧新宮神主文書」(『静岡県史料』三一四六二頁)

(14) 『駿河記』上―二四九頁

(15) 惣社神主の討ち死については、『駿河記』の惣社神主の項に、「天正年間、神祖の御味方として御手先に加り死す。其子新蔵幼少にして神主に補せられ」とある。また天正十三年九月十四日、惣社新蔵宛徳川家康判物写(志貴文書)には、「駿州惣社領之事、右如先神主領掌不可有相違」とあり、『駿河記』の記述を合理的に関連させるなら、前年の小牧長久手の合戦によって討ち死にしたとも考えられる。

- (16) 大久保俊昭氏「駿河井出氏の研究」(『地方史研究』一九六号)
- (17) 新宮昌忠書状写「旧奈古屋大夫文書」(『静岡県史料』三一五三〇頁)
- (18) 『寛政重修諸家譜』一七一三九四頁に、三枝守友の女子について「駿河国浅間新宮の神職中村左近将監昌貞が妻」とある。「昌貞」とは「正清」のことと思われる。
- (19) 浅間社焼失宝物書出シ「旧新宮神主文書」(『静岡県史料』三一四五二頁)